

## 骨粗鬆症による大腿骨頸部脆弱性骨折 の症例 (自然経過例)

お 生      ご し      え い      じ  
生      越      英      二

キーワード：大腿骨頸部骨折，脆弱性骨折，高齢者骨粗鬆症，  
自然経過，保存的療法

### 要 旨

骨粗鬆症を基盤とした大腿骨頸部脆弱性骨折の症例を経験し，8ヶ月間自然経過を観察し，保存的療法で治癒したので若干の文献的考察を加え報告する。

本症は明らかな外傷がなくX線でも明らかな異常は認めないが本症を念頭におき，免荷を行い，転位を生じさせないことが大切である。

### はじめに

骨粗鬆症による大腿骨頸部脆弱性骨折が散見されるようになったが大腿骨頸部脆弱性骨折の自然経過に関する報告は少ない<sup>1,2)</sup>。

今回8ヶ月間経時的にX線撮影を行い，保存的療法で自然経過を観察できた症例を経験したので報告する。

### 症 例

症例：86歳，女性

主訴：左股関節痛，歩行困難

既往症：10年位前から近医にて高血圧症，骨粗鬆症の治療を受けている。

現病歴：平成19年6月22日当院初診。

5日前から特に誘因なく，左股関節痛が出現し，朝から歩行不能となった。初診時X線は明らかな異常は認めず，本症を疑い，当日入院した。腰椎X線は胸腰椎多発性脊椎圧迫骨折があり，骨密度測定はYAM 57% (DEXA法)であった。入院中は免荷を指示し，ビタミンD<sub>3</sub>の投与，エルシトニン10の注射を行った。1ヶ月後のX線では左大腿骨頸部は内側から帯状に骨硬化像が認められ，左大腿骨頸部脆弱性骨折と診断した。2ヶ月後のX線では左大腿骨頸部の内側から外側にかけて約2/3の骨硬化像が認められ，左股関節痛も軽快し，8月31日退院した。3ヶ月後のX線では左大腿骨頸部の骨硬化像は内側から外側にかけてほぼすべてに認められた。左大腿骨頸部の骨硬化像は4ヶ月後X線でピークに達し，5ヶ月後X線から徐々に淡い陰影に変化していった。(図1～図9)

Eiji OGOSHI

医療法人慶生会 生越整形外科クリニック

連絡先：〒694-0064 大田市大田町大田イ263-8



図1 初診時X線



図4 3ヶ月後X線



図2 1ヶ月後X線



図5 4ヶ月後X線



図3 2ヶ月後X線



図6 5ヶ月後X線



図7 6ヶ月後X線



図9 8ヶ月後X線



図8 7ヶ月後X線

## 考 察

1964年 Pentecost<sup>3)</sup>らはストレス骨折のうち、強度の低下した骨に生理的外力による骨折を Insufficiency Fracture と定義した。渡辺<sup>4)</sup>らは Insufficiency Fracture の邦訳語として「脆弱性骨折」とすることを提唱している。

骨の脆弱性を来たす原因として、高齢者の骨粗

鬆症、関節リウマチ、長期のステロイド投与例、透析患者、下肢の人工関節術後の患者がある。大切なことは明らかな外傷がなく、初診時X線で異常がなくても本症をまず疑うことである。本症例のように高齢者の骨粗鬆症が高度で腰椎X線で胸腰椎多発性脊椎圧迫骨折のある患者は特に注意を要する。そして免荷を行い、転位を生じさせないことである。

そうすれば、手術をする症例は減少する。

## ま と め

本症はまず疑うことである。そして免荷を行い、転位を生じさせないことである。

自然経過ではX線の大腿骨頸部の骨硬化像は1ヶ月後に内側から出現し、3ヶ月後には内側から外側にかけてほぼすべてに認められ、4ヶ月後にピークに達し、以後徐々に骨吸収像と変化していった。

文 献

- 1) 倉石修吾 ほか：大腿骨頸部脆弱性骨折の早期診断.  
整形外科, 53 : 1475-1477, 2002
- 2) 生越英二 ほか：島根医学, 20 : 323-331, 2000
- 3) Pentecost, R. L et al: Fatigue, Insufficiency, and  
pathologic fractures. JAMA, 187; 1001-1004, 1964
- 4) 渡辺惣兵衛 ほか：Insufficiency fracture. その定義  
と重要性. 整・災外, 40 : 213-217, 1997